

現代の病は何か

第二次田中内閣の改造で初めて蔵相に就任した際に「ファイナンス」四十九年八月号に寄稿した小論「インフレの脅威を力説している

現代社会は、その規模においても、その速度においても、空前とも言える変貌の過程にあり、それだけに数々の不安定要因を抱えている。

福祉型社会とか、情報社会とかあるいは大衆社会とかいう概念は、すべてこういう現代社会の特徴を捉えようとしたものであると言えよう。しかし、最大の特徴は、何と云つても、人間の物心両面にわたる生活の全分野にわたって、広く深く、インフレマインドがビルト・インされているところを求めるべきではなからうかと思う。人は往々にして伝統的価値観の崩壊を指摘し、新しい価値基準の模索を説いている。しかしそのことが、慢性化したインフレをやむを得ないもの、あるいは、それにかかわりないものと言つのであれば、それは不毛なものになることである。新しい生きがいを求めるにしても、すぐれた道標を追求するに

しても、われわれはインフレという現代病との闘いを無視して、バラ色の夢を描くものであつてはならないのではなからうか。

われわれは、豊かな社会を目ざして廃墟の中から立ち上つた。そうして、相当程度の豊かさを手にすることができた。しかし経済成長に対する信仰は、急激にうすれ、逆にある種の空しささえ覚えるようになってきた。成長に伴う各種の制約や限界を追求していくと、そこには生存自体についてさえ不安が生れてきている。その中でどう生き抜くかを考えるに當つて、進む場合にも、退く場合にも、つきまとつてくるものが、このインフレの影に他ならない。

ゆるぎない権威を誇示していたドルの価値が動揺し、ドルを中心とする世界秩序は、果しない動揺を繰り返している。他方、第三世界は、自らの存在を主張して、新しい秩序を求めている。日本が、今後どのように生きながらえていくことができるかは、勿論たしかにわれわれにとつて深刻な課題である。しかし旧秩序の動揺、新秩序の陣痛の中にも、ふり切らうとしてもふり切れないのが、このインフレというデーモンの魔手である。

インフレという現代病の診断は、困難なことである。しかし敢えて言つなれば、利益は享受するが、これに対応

する犠牲を払うまいとする傾向が、国や集団や個人の有形無形の力をむしばむ、巨大な病根であると言えるように思われる。放縱を自由と思い、浪費を消費ととりちがえるところに問題があるのである。

このような状況の下では、政治はきわめて難しい。政治は、もともとテストイネーションのない航海のようなものである。一日一日を何とか難破しないように安全に航海しなければならぬ。しかし乗船した人々は、明日の寄港地と最終目的地を知り、一刻も早くそこに到着することを望む。しかし、もともとテストイネーションはない。船客の願いは多彩であり、その欲求不満にも限りはない。航海の責任をあずかる者の苦悩は深い。事実世界各国の政権が不安定であり、不人気であるのも、底流にこのような深刻な問題をはらんでいるためである。フランスのジスカールデスタン大統領は、文字通りの辛勝であった。ドイツではブランド氏が首相の座を退いた。アメリカでもニクソン大統領が辞任した。

しかし、いかに悩みは深くとも、われわれは、航海を続けなければならぬ。しかも安全に続けなければならない。そのためにも、このインフレという現代病の害毒に対する認識の徹底と物心両面にわたる生活の節度をつくることこ

そが、最大の仕事ではなからうか。

私は、此の度思わざる時期に、財政金融の仕事にたずさわることとなった。私は日本国民が少しでもこの現代病に対する認識を深め、その根本的な治療法に真剣になられるよう、微力を傾けたいと念願している。